
無垢なる世界の残酷な色

†アラクネ†

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無垢なる世界の残酷な色

【Zコード】

Z8274E

【作者名】

十アラクネ+

【あらすじ】

【淘汰 トウタ】それは生物のうち、環境・条件に適応する者だけが残り、そうでない物は死滅する現象のこと。(夏ホラー2008・百物語編) 参加作品です。

プロローグ

ある時期からふと、奇妙に白い蔓状の植物が全国の至る所で目撃されるようになつた。

それは美しい植物で。

真珠のように滑らかで清い光沢を持ち。

どこか生まれ立ての赤ん坊を連想させる、濁り無く汚れを知らない純粹さを纏つていた。

当初、その見た目の美しさから “Angel Heart” なんてチープな名前を付けられ、ちょっとしたブームにさせなつたものだ。

テレビや雑誌が突然現れた新植物を面白がり、神話になぞらえた美談や怪談、様々な憶測を発信しては世間を沸かせた。

そんなどから、一部の植物学者達が研究に乗り出したのも、最初はただの興味本位に過ぎなかつたのだと思う。

あわよくば新植物の未知の生態を説き明かし、学者として一步先に進むことを夢見た者もいるかもしれない。

しかしながら。

“綺麗な華には刺がある”

この言葉の示す通り、蔓植物のまばゆい美しさの反対側に、強い悪意が含まれていたとしても何の不思議があつたろう。

研究が進むにつれ、学者達は驚愕^{おどろ}し、放心し、みつともなく狼狽^{ろうばい}することとなつた。

もつとも、学者達がデータ上でその事実を突き止めるよりももつと早く、人々のリアルな悲鳴は街のあちこちで上がり始めていたのではあるが。

澄んだ真水のような、陽に煌めく樹液は猛毒。

伸び伸びと急成長を遂げる蔓は、触手のよつに絡んで締め上げ、

巨木すらも枯らし。

地中を這い進む根は、あらゆる養分を貪つて土を空にしていった。

そう。美しい蔓植物は、純白の天使などとは程遠い悪意の塊。人々の生活に爪を立てる、邪惡な災いそのもの。

すぐに駆除隊が結成され、学者達はそれに従い研究内容を改めた。

混乱。焦り。パニック、パニック、パニック。

ニュースで流れるのは、奇異な植物の被害に関する話題ばかり。

そんな最中に、追い撃ちをかけるように現れた、もう一つの大きな苦難。

治療方法不明の病が蔓延し出した頃には、誰もがすっかり疲れ切っていた。

静かな午後

清々しく晴れ渡つた晴天の午後。
大きく開いた窓から緩やかな静風が舞い込み、私と圭太郎を静かに撫でた。

「……っ」

その微かな風の流れに反応したというわけではないのだろうが。ボコリと膨らんだ背中の一部が生き物のように蠢き、彼に低い苦痛の呻きを上げさせた。

「痛むの？」

私は洗濯物を置んでいた手を止め、慌てて彼の顔を覗き込む。

「……っ、だい、大丈夫」

もつれた舌でそう答えた彼の返事は、全く大丈夫そうには聞こえない。

「また薬貰つてこないとだね。……圭太郎」

前は、こうやって二人きりでいる時はいつも、甘えた声で甘つたるい呼び方をしていた。

圭ちゃん、圭たん、圭たま。人前では絶対出せない、二人の時だけ特別に見せられる素の私だ。

普段は凜々しい顔つきでキャリアウーマンを気取っている私だから。そのギャップが可笑しいと、彼はいつも嬉しそうに言っていたものだった。

「圭太郎」

今はゆつくり噛み締めるように、彼の名前をきちんと呼ぶ。略したら略した分、彼の時間が縮まつてしまつような気がして、堪らなく恐ろしいのだ。

「……「じめ、……迷惑かけ……」

ナナ、とひどく苦しそうに私の名前を発音し、彼は何度か瞬きを繰り返した後、枕に頭を預けて動かなくなつた。

疲れて眠つてしまつたようだ。彼の睡眠時間が少しづつ増加していることを思い、私は不安に身を震わせる。

『背中が痛い』

ある時期、そう訴える患者が全国のあらゆる医療機関に殺到した。症状は背中の激痛を主に、発熱、嘔吐、恐ろしいほどの倦怠感。ほんの数日で爆発的に蔓延した奇病の、原因は全く不明。

あまりに短期間、あまりに集中的に起こつたパニックに、新種のウイルスだの某国の細菌テロだのという出鱈目が、本気であらゆる情報網を駆け巡つたものだつた。

だが、今はとても静かだ。

テレビから流れてきた情報を信じるならば、今や人口の約三分の一が、この病に冒されてしまつたらしい。

街はガランと寒々しく、悲嘆と絶望に満ちてひどく暗い。

……カラカラカラ

アスファルトを転がる車椅子の車輪の音が軽い。背中ばかり膨ら

んで、すっかり痩せ細つたガリガリの彼が軽い。

「大丈夫だよ」

その言葉に、何かの根拠や気休めがあるわけではなかつた。
けれど私は、それでも繰り返し同じ言葉を囁く。

「大丈夫、大丈夫だからね。圭太郎」

朝の柔らかな陽射しに照らされ、ぐつたりと車椅子にもたれた彼の髪が薄茶色に透けている。

生まれて間もない赤ん坊の髪のようだ。

私は車道の真ん中で車椅子を止め、屈み込んで彼の臉にキスした。
こめかみに添えた指にザラついた髪が絡まり、手を引くと彼の髪は『じつそりと抜け落ちた。

「……。大丈夫だよ……」

街の中心から離れれば離れるほど、辺りの光景は異様なものとなつてくる。

目につくのは、輝くような乳白色ばかり。今や人の胴よりも太く成長した、巨大な蔓植物の絡み合つ姿ばかりだ。

太古の地球を彷彿させるような光景を見ながら、ふと思い出す。

『これは地球そのものによる浄化作用なのだ。我々人間こそ、害あるものとして駆除されようとしている』

まだ、事態がここまで悪化していなかつた頃のことだ。
とある番組の生放送中のスタジオで、そう言って泣き崩れた学者がいた。

蔓植物についての見解、地球の今後などについて議論していた場で、持論を語るうちに感極まつてしまつたようだつた。

その頃はまだ、それでも事態を軽く見ていた者も多かつた。

メインキャスターが半ば呆れたような笑いを浮かべ、不適切な発言があつたなどと詫びていたくらいだ。

今思えば、彼の言葉の何が不適切だったものか。
奇病の突然の蔓延と共に、人々はようやく目を覚まし、理解した
のだ。

我々人間が、淘汰されつつあるという事実を。

好き勝手に繁栄し続けて来た人間を、もはやこの惑星は必要とし
ていない。

望みは碎けし

ひどく時間をかけて、私は街の外れにある病院に辿り着いた。

「ちょっと、待つてね」

車椅子を入り口の横に停め、圭太郎にそつと口付けしてから中に入る。

「先生？」

無人の受付カウンターを素通りし、私は奥の院長室へ向かった。ここは今でも諦めずに奇病の打破に取り組む、この地区では唯一頼りになる病院だった。

医院長はすでに病に倒れてしまっているが、医大生だった息子が後を引き継いで研究を続けている。

「先生……」

覗いた院長室は無人で、代わりに奥の娯楽室から物音が聞こえた。「先生、あの、瀬川です」ピタリと閉じた扉に呼び掛けるも、返事は無い。

何度もノックを繰り返した後、遠慮がちにドアノブを握つてみると鍵は掛けられていなかった。

「先生、沢木圭太郎の痛み止めの薬を……」

言いかけた私は、思わず言葉を飲んで立ち止まった。

「……っ！」

裕福な患者御用達だった、広々と娛樂設備の整つた特別室。

広いその空間からあらゆる機器が姿を消し、床に敷き詰められているのは大量のシーツだけ。

「何……？ これ……」

そしてそのシーツの上で、赤ん坊のように丸まつた数人の男女。奇病に蝕まれ、末期を迎えた何人もの患者達。

「瀬川さん？」

名を呼ばれて、私はギクリと振り返る。

部屋の奥にある個室の扉が、少しだけ開いていた。

「あ、あの」

どうしていいか分からず、私は床と扉に交互に視線を走らせた。

「瀬川さん」

再び呼ばれ、引き攣った声で何とか応じる。

冷たい不安がよぎつた。

年若い医師の声色に、何とも言えない違和感を感じたからだ。

「……あ、あの、先生？ どうかなさったんですか」

頭の中には奇病に蝕まれた医師の姿がハッキリと描かれているといつていい。

「」の期に及んでまだ、的外れな質問で「」まかそうとしてしまつ口が、どうしようもなく哀れに思えた。

「先生……」

扉の向こうからの返事は無く、ただ、冷たい沈黙だけが流れる。

（ああ……）

私は唇を噛み締めてうなだれた。

唯一残っていた希望の火が消えたのだと、漠然と理解していた。

「……瀬川さんは、覚えてるかなあ」

私は伏せた目を少しだけ上げ、薄く開いた扉に視線をやる。

「」のさ、医院長が突然倒れた時……、俺、ずいぶん迷惑かけたよなあ

自他共に認める名医だった医院長。

つまりこの青年医師の母親が倒れた時の、彼の狂乱振りを忘れる
はずもない。

『何故？ 何故？ 何故！』

獣のように咆哮し、ひたすらに泣き乱れていた痛々しい姿。

『何故自分のような凡人が生き残って、母のような優れた人間が死
に行くというのか！』

「……あの時は、取り乱してしまってすまなかつたねえ」
妙に間延びする声色が不気味で、悲しかつた。

「……いいえ」

「でもさ、でもさあ。研究してて分かつたんだよ。やっぱり、俺は
正し、正しかつたんだって」

唯一頼りにしていた医者の、もつれた口調。

……まるで弱り切つた圭太郎のようだ。

「俺はただだ正し、……つあ、ああ」
興奮したような、脱力したような、正常とは遥かに掛け離れたそ
の声色。

スウッと、私の中の何かが退いていく。

カメラが被写体から音も無く遠ざかるようにな。

私と私の属する世界が現實から取り残され。

そして、孤立する。

狂ウ

「……くそ野郎……」

「コトリ。

それは私が、床に放置されていたガラスの置物を拾い上げた音だ。

「……ふざけんな」

まるで夢見るよつに田を細め、ずつしりと重い置物をしつかりと片手に掴む。

全てが遠く、非現実的に思えた。

自分が歩く靴音、ゆっくりと確かなそれさえも、どこか瞼で頼りなく。

ああ、この感覚は久しぶりだ。

ヒリヒリするような、全身を細かい針で突かれているような、奇妙に夢現で恐ろしくハッキリと明確な。

『死ねばいい』

意思。

圭太郎が発病したと同時に、彼を生きた実験体として欲した地元大学の学生。

この奇病には治療法がないと研究を投げた、昔馴染みの信頼していた街医者。

苦しむ彼を見て、あからさまに不快を顔に出してみせた奴ら……。

『みんな、みんな』

硬い、重い、鋭い、凶器になりうる物がこの手にあれば簡単……。

『死ねばいい』

振り上げ、振り下ろし、容赦無く刺し、貫き、殴打して。

肉の破壊される湿つた音を聞きながら。

絡み付く血飛沫を浴びて、激しく深く深く喘いで。

奇病パニックの最中。

無法地帯と化した街で、私は何度この感覚に捕われたことだろう。全て幻覚だつたようにも思える。

だけど確かに覚えていた。

手が、腕が、凶器を奮った時の生々しい感触を、あまりにも鮮烈に覚えていた。

たくさんのたくさんの人が病に倒れ、すっかり静寂に満ちた、今。

あの時期の自分。

沸騰して、煮えたぎった街の人々。

私を含め、全ての人の生活を飲み込んだ、非現実的な『狂氣』

それら全てが、遠い昔のことのように思えるのに。
ふと、こうやって激怒の爆発に見舞われた時、それらは確かな現
実としてこの体に蘇つてくる。

私は、感情のままに人を殺したことがあったのだ。

平和な頃。

代わり映えの無い日々に退屈を感じ、平和をあって当然と思つて
いた頃。

テレビに流れる通り魔事件のニュース、悲惨な事件を起こした犯
人に対して、共感を覚えたことなど一度も無かつた。
発作的に。興奮して。

そんな感情、殺人の理由になるはずが無いと思った。

人が人を死に至らせるという行為は、神の領域に踏み込む禁忌。
そんな単純な理由で、冒せる行いでは無い、と。

だけど。

そう思えていた頃の自分は、ただ幸運だつただけなのだ。

私は身をもつて知つた。

人は環境と条件によつて、あまりにも容易く狂えるのだと。

だつて見たじやないか。

同じように狂気に走つた健常者の数々。

愛しい者の突然の破滅を目の当たりにさせられ、悲しみ荒れ果て、
黒い嵐と成り果てた者達の凶行。

それが人間。

スイッチの入り所は人それぞれ。

だから、私はある意味正常なのだ。

こんな凄まじいストレスに晒され、 平静を保てる者がいるならば、

それこそ人を離れたモンスター。

私は、 正常。

この静かな爆発も、 人として当然の在り方。

だか ら 。

私は無意識に獲物を狙う猫のように素早く、 奥の個室の前までしつかりと歩み寄り。

ドアノブを掴むと同時に、 ほんの僅かに体を硬直させた。

ノブを引いたと同時に、 右足で床を蹴つて凶器を持った腕を振り上げた。

ガラスの置物の重さが、 そのまま肉を碎く強さとなる……

っ!!

置物を振り下ろそうとしていた腕が、ピタリと止まる。

殺意に燃えていた私の目が凍り、見た物を理解し切れず、戸惑う。

「…………あ…………」

白い大きなベッドの上に、青年医師は座っていた。
いや、座っていたというのは少し違うかもしない。

置かれていた。

そう、置かれていたというのが一番正しい表現だろう。

「瀬川さん」

ひどく緩慢に口を開いた彼の下半身には。
あるべき両の足が無く、代わりに萎びた皮のような物が垂れ下が
つていた。

げつそりと痩せこけた頬に、骨の浮き出た上半身。
痛々しく肋骨の浮き出た彼の脇腹に。
深々と。

歯を立てている、アレは何か。

乱暴な行為を行つてゐるにも関わらず……。

……乳を飲む赤ん坊のよつて、穏やかな顔をしたアレは……

「……医院……長？」

そう、それは確かに青年医師の母親である、元医院長の顔をしていた。

けれど、違う。

以前とは、全く違う。

細長く切れ上がり、黒目だけしか無い濡れた瞳。
異様に白く細い、半分透けたような華奢な体。

背中に伸びるガラスのような、鋭い幾本もの羽根のような物……。

「ヒツ……イー！？」

思わず後ずさる私に、青年医師が震んだ瞳を向けた。

「怖がらないで」

その顔に苦痛の色は無かつたが、ただ絶望的なまでの脱力が浮かんでいた。

「……前に」

ぽんやりと虚うな、けれど恍惚としているよつてにも見える、不思議な表情。

「前に、テレビに出てたさあ」

彼がひどくゆっくりとした口調で語ったのは、人類淘汰説を唱えた件の学者の話だった。

「……あの学者は、……半分だけ、正解だつたんだよ」

人類は行き過ぎた自己満足を求めるまで。

確かにこの惑星から追い払われるべき、害虫となり下がった。

あの蔓植物は間違い無く、地球自身が放った治療用のワクチンそのもの。

人類という、悪しき存在を自らの体から消し去る為に。

「……ああ、でも、でも」

人類だって、伊達に億を数える年月を地球の上で過ごしたわけではない。

化学や医学の発達にいくら野性を鈍らせていても、本能まで廃れてしまつたわけでは、決してない。

背部の痛みに苦しみ、倒れた人々のそれは病ではない。

……彼は確信を込めて、断言する。

「進化だつたんだよ」

本来は永い永い時をかけて行うべき事を、ほんの刹那の時間で成さねばならなかつた。

故に、ひどい苦痛を伴つた。

故に、大変な犠牲を払わねばならなかつた。

輝かしき進化の資格があつた肉体の持ち主でも、最終段階まで行き着けずに死んだ者がほとんど。

元の自分の肉体そのものを養分とし、新たな肉体へと変容する痛み。

……その労力たるや、生半可なものでは無かつたのだから。

「……でも、全てを乗り越えて残つ、残つた者は」

ふいに背後でガタンとドアの鳴る音がし、私はハッと振り向いた。

進み行く者達

視界を白い影が過ぎる。

慌てて田で追つた私の頬に、生暖かい何者かの呼吸。

「つあ！？」

私は狼狽してよろけ、床に尻餅をついて後退つた。

「…………あ。…………ああ」

喉から漏れるのは、もつれた喘ぎだけで。

視線は田の前の異形から離すことが出来ない。

ヒュウ、ヒ。

異形は細い息を吐き、ゆっくりとその白い顔を近付けて来た。

ヒュウ……

半ばパニックに陥りながらも、閃いた記憶の光が少しだけ私を冷静にさせる。

これはさつき、特別室に横たわっていたうちの一人だ。

医院長と同じように細く切れ上がった黒目だけの瞳、半透明の体から突き出した硝子のような羽が、キラキラと窓から差し込む陽光に反射している。

ヒュウウ……

色の無い唇が吐息を漏らしながら近付き、私の頬から首筋すすぐれを滑っていく。

(食われる)

ギュッと手をつむり、私は恐怖と困惑をどうとも出来ずに固まつた。

生暖かい息からは青臭い草の匂いが微かにして、唇の隙間に覗く歯の列がいやに白かった。

その白い歯が深々と肉に食い込む痛みを想像して、私は息を止める。

「……大丈夫だよ」

ふいに青年医師の穏やかな声がかけられ、私は強張った臉を恐る恐る開いた。

全身が緊張による汗でじっとりと湿っている。
顔を上げてみるとすでに、そこに異形の少女はいなかつた。
いつ離れたのか音も無く、その姿は開け放たれた窓辺にあつた。
ホツと力が抜けると同時に、不思議に引き寄せられた。
少女と、少女の溶けたその光景に。

キラキラ。キラキラ。

大木のように成長し絡み合つた蔓植物に、まばゆい太陽の光が弾けている。

あまりに混じり気の無い白さに、どこか造り物めいた不自然ささえ感じていたというのに。

太い蔓にじやれつく異形の少女は、何と違和感なくその白さに溶け込んでいることだらう。

細い手足を緩やかに蔓に絡ませ。

柔らかな羽が舞うように。

小さな妖精が踊るようだ。

太陽を華奢な体に透かし、自身も弾けるように輝きながら。

半開きの滑らかな唇を、口付けるように蔓に寄せて……

(……樹液を)

少女の牙で傷ついた蔓の表面から、透明な樹液が滲み出す。
ぶつくりと丸く溢れた樹液を、少女の柔らかそうな舌が美味しそうに。

(飲んでる？……でも)

蔓植物は猛毒だったはずではないのか。

疑問の答は、すぐに青年医師が与えてくれた。

「我々にとつては有害でも……、彼らにとつては貴重な栄養源になるようなんだ」

青年医師は朧な視線を遠くに流した。

「彼らは分かち合ひ、……多くを望まず、決して、人のものを奪おうとしたりはせず……」

息子の体を貪り続けていた元医院長である異形の女が、音も無く体勢を変えた。

赤ん坊にするように優しい仕草で息子に覆い被さり、その唇を躊躇いも無く首筋に、動脈の上に。

カシユツ

小気味よい音。

青年医師の首の、太い、大切な血管が切断された音。

「君には、絶対誰も手を出さない」

鮮やかな血の飛沫を母親に捧げながら、彼は最後に消え入るよう

な声で言つた。

「……君は、彼のものだから」

寂し氣に笑つた青年医師を残して、私はようめきながら病室を出た。

静まり返つた廊下を抜け、受付カウンターの前をもつれた足で走り抜けた。

ほとんど体当たりするような形で、出入口の大扉を押し開ける。

わっと押し寄せる、外の湿つた熱気。

そこには、少し前と何も変わらない、見慣れた初夏の午後が満ちていた。

煌めく太陽。

太陽の熱気を心地良く中和してくれる、涼やかな西の風。

「……」

私は不思議に汗が乾いていくのを感じながら、来た時同様、きちんと扉の横で待っている車椅子を見やつた。

「……待たせて、『ごめんね』

微かに頷いたように見える圭太郎に、いつものようにキスして。

私は、ゆっくりと車椅子を押しながら病院を後にした。

Hピローグ

カラカラカラ。

車椅子の車輪が鳴っている。

カラカラカラカラ……

それは今や、私が彼を乗せて道を行く音では無い。
逆さまにひっくり返ったまま放置され、風に押された車輪が機械
的に動くだけの、虚しい無意味な空回り。

カラカラ……

私はうつすらと目を開き、少しだけ首を動かして上を見た。

真っ白な光が夢のように瞬き、そこを自由に飛び回る妖精達の姿
が見える。

とても、綺麗だ。

太陽に透けて煌めく大きな羽根と、踊るよつに跳ねる真つ白な体
と……

私はぼんやりと霞みのかかつた目を何度も瞬かせて、自分を抱く暖かい者の顔を見つめた。
すると彼もその優しい瞳をスッと向けて、じつと私を見返していく。
る。

深く、黒い瞳。

切れ長の凛とした、白い部分の無いひたすらに純黒の瞳。

生まれたばかりの赤ん坊、それこそまだ朧な光程度しか見えないような赤ん坊が、こんな深い目の色をしている。

ふと、そんなことを思った。

彼は微笑むような形に目を細め、横抱きにした私にゅっくりと顔を近付けた。

屈み込んで迫った唇は、私のそれを素通りし。
サクリ、と。

鋭い牙が首を裂いて突き立てられる、不思議に痛みの無い侵入の感覚。

その部分からじんわりと熱が溢れ、私は小さく喘ぎを漏らした。

(ああ……)

自身が溶かされ、汲み上げられていく。
そつと優しく吸収され、少しずつ同化していく。
混じり合っていく。

照り付ける太陽が眩しくて、吹き抜ける柔らかな風が心地良かつた。

白い蔓達は一斉に大輪の花を咲かせていて、風が屈ぐ度にサラサラと甘い香りのする花粉を飛ばしている。

もうすぐ、求愛の時期を迎える。

それが分かるのは、もつ私が彼と半分以上、同化している証なのに違いない。

太陽が眩しい。

眩しくて目を開けていられない。

もつ手足の感覚は無く、きっとあの青年医師のように、吸い込むとされて皮だけを垂らした不様な姿なのだからとは思つけれど。

どうでもいい。

ただ、早く完全に彼と溶け合いたいと望んでいる。

愛する者に食され、混じり、絡み合って溶けて。

もつすぐ、私もこの地球の一員となれる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8274e/>

無垢なる世界の残酷な色

2010年10月21日22時36分発行